

小池光歌集

『梨の花』

(現代短歌社)

妻に先立たれて五年。教師を辞めて九年。愛猫の死。大きな影響を受けた斎藤茂吉の享年に近づいたこと。著者はそれらを嘆き悲しみつつも、素朴に歌う。

老いの身の茂吉見つめし最上川いまのわれより三つ四つ若く

猫さへもいのちかなしく少しづつ少しづつして老いてゆきたり

ただ、今だからこそ「あはれ」と感じるようになった、何気ない物事を著者は次々と捉えてゆく。

終曲に近づくグレン・グールドの「ゴルトベルク」をわれは惜しまむ

変奏を繰り返すうちに、いつの間にか冒頭の Aria に戻って終わる、ゴルトベルク変奏曲。こんな所にも、輪廻転生のような「あはれ」を感じているのではなからうか。

プロの技といふもの庭の草取りにもあり短歌にもありなべて尊し

著者の歌は決してさらりと書かれたわけではない。選び抜かれた言葉だからこそ、心にゆつくりと染み渡る。著者の持つ「プロの技」を垣間見た。(伊藤 祐楓)

田中拓也歌集

『東京』

(本阿弥書店)

光、影、闇。歌集を通して頻出するこれら三つの言葉からは、作者が対象の本質に思いをはせ、自己の存在や位置を確かめようとする深いまなざしが感じられる。

それぞれの影持つ石の沈黙の夜と向きあい闇を抱きあう

眼を閉じて太古の闇を求めおり古塚の草の上に立ちつつ

二〇一一年から二〇一八年までの作品を取めた第三歌集。作者は茨城県の高校教師を辞し、両親が暮らす千葉県に戻る。介護の身である父の姿に命の燦めきを見る。

「次はいつ来るのか」と問う父の眼に宿る光を命と思う

三菱軍需工場で銃弾磨きたる十本の指十枚の爪

再就職先は東京の高校。震災後も人の営みは地中の底流のように静かで力強い。

永久の闇を抱きて流れゆく暗渠の底の砂の静けさ

作者にとっての「闇」とは、得体の知れない洞ではなく、光を待ち望む命の源なのかもしれない。(薄葉 茂)

佐佐木定綱歌集

『月を食う』

(角川書店)

〈食〉、しかも、汁物・なまぐさもの・分泌物。これらを前面に出すことで高度にシステム化、自動化された現代社会の綻びを引つ張り出し、露悪的に、自虐的に突き付けてくる。

突つ伏して嘔吐を始めるお客様ありがとうございます
とうございまして大丈夫ですか？

小綺麗な世界が巧妙に隠蔽している〈汚穢〉はしばしば小動物・昆虫・そして食材の〈死〉としてあらわれる。世界の裏側、人間の内側には何かが隠れているはずだ、と苛立つ作者。(気持が悪い) 題材は潔癖の裏返しではないか。

冷たい水いくら飲んでもおまえのように生きられねえよ ヒヤシンス 咲く

一九八六年生まれ、東京で生活する佐佐木定綱の第一歌集。つくりごとや綺麗事ではない〈本物の美〉はどこにある、そんな叫びが聞こえてくるようだ。

嘘くさい建前に反して、本音は往々にして汚い。それを超えた美しい本心、本質を求める心。彼は、生ごみの山に手を突っ込んで、宝物を探している。(白川ユウコ)